

世界難民移住移動者の日

2026.9.27

112th World Day of
Refugees, Migrants and
People on the Move 2026



2026年世界難民移住移動者の日にあたって

日本カトリックいのち・平和・人権委員会
委員長 森山 信三

今年の世界難民移住移動者の日のテーマは「これらの小さな者を一人でも」です。教皇レオ十四世は、マタイ福音書の「わたしの名のためにこのような一人の子どもを受け入れる人は、わたしを受け入れるのである」（マタイ 18・5）というイエスの言葉から、このテーマを選ばれました。このタイトルには、移住のただ中にある子どもたち一人ひとりを大切に、その尊厳を守ろうとする教会の思いが込められています。

教皇は「福音は〈一人でも〉ということばで、わたしたちに計算をしないように求めます。これは統計や数の問題ではありません。わたしたちは子どもたちにおいて主を受け入れ、主と出会うことができるのです」といわれ、子どもたちの尊厳を守ることは、主イエスと出会うことだと述べられます。

イエスの時代、子どもたちの人間としての尊厳、基本的人権は認められていませんでしたが、現代世界においても、子どもたちの権利や尊厳を脅かす状況は何ら改善されているとは言えず、緊急かつ効果的対応が求められているのです。

終わりの見えない各地の戦争、また気候変動に伴う大規模な災害が頻発する世界の中で、最初に犠牲になるのは子どもたちです。教皇の呼びかけに応じて、わたしたちも最も弱い立場にある人々を援助し、そのいのちを擁護する社会となりますよう、ともに歩んでまいりましょう。

日本カトリック いのち・平和・人権委員会
Catholic Committee of Japan for Life, Peace and Human Rights

第112回「世界難民移住移動者の日」 教皇メッセージ 2026年9月27日

これらの小さな者を一人でも（マタイ18・10参照）

親愛なる兄弟姉妹の皆様。

毎年、「世界難民移住移動者の日」は、移住者という複雑な現象のさまざまな側面に目を向けるようにわたしたちを招きます。第112回となる今年のテーマ「これらの小さな者を一人でも」は、移住や避難という経験を直接味わっている未成年者と彼らが受けるべきケア、そして主の約束へと注意を向けさせます。「わたしの名のためにこのような子どもの一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」（マルコ9・37）。

避難を余儀なくされた未成年者——脆弱（ぜいじゃく）さという複雑な現実

未成年者は、世界の移住の流れの中でもっとも脆弱な状況に置かれています。彼らは具体的な顔と固有の歴史をもっており、わたしたちの良心に訴えかけます。毎年、何百万もの子どもと青少年が、戦争、貧困、暴力、環境災害、その他の悲惨な事情によって故郷を離れることを余儀なくされています。そして残念ながらその数は増え続けています。この惨事に対する経済、政治、軍事上の責任ははかりしれません。苦しみは移動だけでは終わりません。子どもたちは両親、兄弟姉妹、友人を失うばかりか、言語に絶する暴力を目の当たりにします。長期間、家族と離れ離れになった他の子どもたちは、再会を試みながらも別離の苦しみを味わい続けます。また、両親とともに移動する未成年者も、トラウマとなる極限的な状況にさらされます。最後に、強制送還によって両親と引き離された子どもたちの悲惨な状況を忘れてはなりません。

このようなすでに悲惨な状況に、さらなる悲惨な事実が加わります。移住経路での死、人身取引と虐待、武力紛争のための未成年者の徴兵、性暴力、強制結婚、道中に被る、あるいは目撃する残虐行為です。未成年者の尊厳があまりにも多くのかたちで踏みにじられています。

教皇フランシスコは、「弱くて声も上げられない子どもの移住者たち」をテーマとする2017年の「世界難民移住移動者の日」メッセージで、次のことを思い起こさせました。「未

成年であり、外国人であり、無防備であるという三つの要因のために、自らを守るすべのない子どもたち「……」はさまざまな理由により、故郷から遠く離れた土地で、家族の愛情から離れて生活しなければならないのです」。

しかし、このような暗闇においても、連帯の光がなくなることはありません。個人、家族、民間機関、教会共同体は、道の向こう側を通らないという選択をします（ルカ10・29－37参照）。家の戸を開けてこれらの未成年者に家族の温もりを取り戻させる家庭、受け入れセンターで働く教師、日々、移住経路や町の中で子どもたちの目に見えない傷をいやそうと努めるボランティアや支援者に思いを致します。これらの人々はその献身によって、愛が無関心に打ち勝つことをあかしします。

これらの小さな者を一人でも

わたしはこの悲惨な現実を前にして、すべての人の良心に深く訴えかけるイエスのことばを思います。「わたしの名のためにこのような一人の子どもを受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」（マタイ18・5）。これは数や統計の問題ではありません。福音は〈一人でも〉ということばで、わたしたちに計算をしないように求めます。すべての子ども、すべての人は無限の尊厳をもっています。彼らは神の像であり、似姿です（創世記1・26参照）。主は彼らとともにおられます。わたしたちは未成年の移住者一人ひとりを前にして、人間性と信仰に基づいた行為を求められます。実際、わたしたちは子どもたちにおいて主を受け入れ、主と出会うことができるのです。この呼びかけは、マタイによる福音書における主のもう一つのことばに照らすと、より切迫したものとなります。「お前たちは、わたしが「……」旅をしていたときに宿を貸し（てくれた）」（マタイ25・35）。

残念ながら、未成年の移住者は、彼らを保護し支える大人がいらないために、無視されがちです。それゆえ、通過する国や目指す国において保護し受け入れるだけでなく、出身国においても、彼らが避難せざるをえない原因を取り除くための対応が必要です。避難を余儀なくさせられた未成年者は、出エジプト記の中に見いだされる人々と同じように、今日も神に叫びを上げます。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出（す）」（出エジプト3・7－8）。神は人々の叫び声を聞き、彼らを救い出すために、モーセにされたのと同じように、わたしたちの良心と行動にも強く呼びかけます。わたしたちは無関心なままでいたり、多くの苦しみに慣れてしまったりしてはなりません。

すべての人の責任に対する呼びかけ

これらの小さな者の一人であっても、〈日常生活を通して〉わたしたちに呼びかけてきます。目と心を開いて、彼ら一人ひとりの人生と不安と夢に深く耳を傾け、人間を自分とは直接関係のない統計上のデータにおとしめるような無関心を乗り越えるようにと。それは、子どもたちを「移住者」である以前に尊厳ある存在として認め、生存権、教育権、身体的・精神的・霊的・道徳的・社会的な意味で十全に成長し発達できる生活を送る権利——といった、彼らの基本的権利を守るようにとの招きです。

これらの小さな者の一人であっても、〈教会生活を通して〉わたしたちに呼びかけてきます。受け入れを抽象的な概念から、安定した司牧実践へと変えるようにと。この課題を特別なカリスマを与えられた会や団体だけにゆだねてはなりません。日々の生活の中でわたしたちに呼びかける具体的な顔を前にして、すべてのキリスト教共同体は彼らを自分たちの子とみなし、一人ひとりの具体的な人生に寄り添うように求められます。キリスト教共同体が、難民や移住者を教会家族の完全な一員として受け入れ尊重し、単なる福祉主義の論理を超えた新たな教育的・霊的な歩み——個々の事情に合わせたものも含め——を促進するように励まさなければなりません。とくに不可欠なのは、子どもの移住者たちがしばしば味わう孤独、孤立、疎外を防ぎ、地域の若者と移住者の若者がともに励まし合いながら相互の尊重と連帯と友愛の道を歩めるような、出会いと統合に向かう動きを推進することです。

これらの小さな者の一人であっても、〈諸宗教の展望を通して〉わたしたちに思い起こさせます。小さな者の脆弱性は宗教の枠を超え、わたしたちを共通的人道的・精神的な責任において結びつけるのだと。このことは具体的な諸宗教対話のための肥沃な土壌となります。宗教者はそこでそれぞれの超越の意味から水をくんで、保護のネットワーク構築に協力します。宗教共同体は、すべての若者がそれぞれの文化的アイデンティティを尊重され大切にされ、それにより過激な集団による過激化の危険を防ぐ場を築くよう求められます。未成年者を守ることは、究極的には、彼らのうちに刻まれた神的な刻印を守ることを意味します。

これらの小さな者の一人であっても、〈市民制度の枠組みを通して〉未成年者の最善の利益という原理を再確認するようわたしたちに求めてきます。公的機関も民間機関も、すべての子どもと青少年の保護と尊厳を中心に置かなければなりません。それには、効果的な法的保護手段の採用、家族の再統合の促進、分離によるトラウマの防止が含まれます。緊急に必要なのは視点の転換です。議論の軸を、単なる移住の管理から、人

権の完全かつ即時的な保護へと移さなければなりません。そのために、「移住者の保護と受け入れと真の統合の機会を保障しうる、協調的・連带的・実効的な対応」（教皇レオ十四世「スペイン議会での演説（2026年6月8日）」）を採用すべきです。

未成年の移住者と難民を、至聖なるマリアの母としてのご保護にゆだねます。マリアは聖ヨセフとまだ幼いイエスとともに、ヘロデの残虐な暴力とエジプトへの避難の苦しみを味わいました（マタイ2・13-15参照）。マリアが彼ら未成年者とともに歩み、わたしたちの共同体が福音の生きた信頼できるしりしとなるよう助けてくださいますように。

バチカンにて、2026年8月11日、アッシジの聖クララの記念日

教皇レオ十四世



On the Occasion of the 2026 World Day of Refugees, Migrants and People on the Move

Catholic Committee of Japan for Life, Peace and Human Rights
Chairperson: Bishop Shinzo Moriyama

The theme for this year's World Day of Migrants, Refugees and People on the Move is, "Even just one of these children." Pope Leo XIV chose this theme based on Jesus's words in the Gospel of Matthew: "Whoever welcomes one such child in my name welcomes me" (Mt 18:5). This title embodies the Church's fervent desire to cherish and uphold the dignity of every child involved in migration.

The Holy Father says, "The Gospel, with the words 'even just one,' asks us not to count. This is not a matter of statistics or numbers. Through children, we can welcome the Lord and encounter him." He thus reminds us that protecting the dignity of children means encountering the Lord Jesus. In the time of Jesus, the human dignity and fundamental rights of children were not recognized. But in today's world as well, the situations threatening children's rights and dignity cannot be said to have improved at all. The reality of this situation demands an urgent and effective response from us.

In a world plagued by endless wars and frequent large-scale disasters driven by climate change, it is the children who suffer the consequences first. Let us respond to the Pope's call by journeying together to create a society that supports the most vulnerable and protects their lives.

2026년 세계 이주민과 난민의 날에

일본 가톨릭 생명, 평화, 인권위원회
위원장 모리야마 신조 주교

올해 세계 이주민과 난민의 날 교황담화 주제는 작은 이들 가운데 하나라도입니다. 교황 레오 14세께서는 마태오 복음서의 "누구든지 이런 어린이 하나를 내 이름으로 받아들이면 나를 받아들이는 것이다." (마태오 복음 18:5)라는 예수님의 말씀에서 이 주제를 선택하셨습니다.

교황님께서서는 "'단 한 사람이라도'라는 말씀으로, 복음은 우리에게 계산하지 말 것을 요구하십니다. 이것은 통계나 숫자의 문제가 아닙니다. 우리는 어린이들 안에서 주님을 받아들이고 주님을 만날 수 있습니다."라고 말씀하시며, 어린이들의 존엄을 지키는 것은 주 예수님을 만나는 것이라고 강조하십니다.

예수님의 시대에, 아이들의 인간으로서의 존엄, 기본적 인권은 인정되지 않았습지만, 현대 세계에서도, 아이들의 권리나 존엄을 위협하는 상황은 개선되고 있다고는 말하기는 힘들며, 그에 따른 긴급하고 효과적인 대응이 요구되고 있습니다.

끝이 보이지 않는 각지의 전쟁, 그리고 기후변화에 따른 대규모 재해가 빈발하는 세계 속에서, 제일 먼저 희생되는 것은 아이들입니다. 교황님의 부름에 응하여, 우리도 가장 약한 입장에 있는 사람들을 원조하고, 그 생명을 지켜가는 사회가 되도록, 함께 나아 갑시다.

Por ocasião do Dia Mundial do Migrante e do Refugiado de 2026

Comissão Católica do Japão para a Vida, a Paz e os Direitos Humanos
Presidente: Dom Shinzo Moriyama, bispo

O tema do Dia Mundial do Migrante e do Refugiado deste ano é "Mesmo uma só destas crianças". O Papa Leão XIV escolheu esse tema a partir das palavras de Jesus no Evangelho segundo Mateus: «Quem receber um menino como este, em meu nome, é a mim que recebe» (Mt 18,5). No título está expressa a solicitude da Igreja, que deseja cuidar de cada uma das crianças que vivem em meio à experiência migratória e defender a sua dignidade.

O Santo Padre afirma: "O Evangelho, com as palavras 'mesmo que seja apenas um', pede-nos que não façamos cálculos. Esta não é uma questão de estatísticas ou de números. Nas crianças, podemos acolher o Senhor e encontrar-nos com Ele." Assim, ele nos recorda que proteger a dignidade das crianças significa encontrar o Senhor Jesus.

No tempo de Jesus, não se reconhecia às crianças a dignidade humana nem os direitos fundamentais. Também no mundo de hoje, porém, não se pode dizer que as situações que ameaçam os direitos e a dignidade das crianças tenham melhorado em algo, e por isso se exige uma resposta urgente e eficaz.

Em um mundo marcado por guerras sem fim à vista em tantas regiões e por desastres de grandes proporções que se repetem em razão das mudanças climáticas, as primeiras vítimas são sempre as crianças. Respondendo ao apelo do Papa, caminhemos também nós juntos, para que a nossa sociedade socorra as pessoas em situação de maior fragilidade e defenda a vida de cada uma delas.

今年世界难民与移民日的主题是：“即使是这些小孩中的一个”。教宗良十四世从《玛窦福音》中耶稣的话选择了这个主题：“无论谁因我的名字，收留一个这样的小孩，就是收留我。”（玛18:5）这个主题表达了教会的心愿：关心每一位在迁移和逃难中的儿童，保护他们应有的尊严。

教宗说：“福音提醒我们，即使只有一个孩子，也值得我们付出全部的关怀，因为这并不是统计数字或人数多少的问题。在每一个孩子身上，我们都能够接纳主，并与主相遇。”教宗强调，守护孩子们的尊严，就是接纳主耶稣，与祂相遇。

在耶稣生活的时代，儿童的尊严和基本权利并不被社会重视。可是到了今天，儿童的权利和尊严仍然受到严重威胁。因此，我们必须尽快采取实际而有效的行动。如今，世界各地的战争迟迟未结束，气候变化造成的重大灾害也越来越多。在这些危机中，最先受到伤害的往往是孩子。

让我们回应教宗的呼吁，帮助处境最困难、最弱小的人，保护每一个生命，共同建设一个尊重生命、彼此扶持的社会，并一起向前同行。

Con motivo del Día Mundial de los Refugiados, Migrantes y Personas Desplazadas del año 2026 Comité Católico de Japón para la Vida, la Paz y los Derechos Humanos Presidente: Mons. Shinzo Moriyama, Obispo

El tema de este año para el Día Mundial de los Refugiados, Migrantes y Personas Desplazadas es «Incluso uno solo de estos pequeños». El Papa León XIV eligió este tema de las palabras de Jesús en el Evangelio de Mateo: «El que recibe a un niño como este en mi nombre, me recibe a mí» (Mateo 18:5). Este título refleja el deseo de la Iglesia de proteger a cada niño y niña en situación de desplazamiento y salvaguardar su dignidad.

El Santo Padre afirma: «Con estas palabras del Evangelio: “aunque sea uno solo”, pidiéndonos así que no hagamos cálculos. Pues no se trata de una cuestión de estadísticas o de números. En cada niño podemos acoger al Señor y encontrarnos con Él». De este modo, señala que proteger la dignidad de los niños significa encontrarnos con el Señor Jesús.

En tiempos de Jesús, la dignidad y los derechos humanos fundamentales de la infancia no eran reconocidos, y en el mundo actual, la situación que amenaza los derechos y la dignidad de los niños no ha mejorado en absoluto, por lo que se necesita una respuesta urgente y eficaz.

En un mundo asolado por guerras aparentemente interminables y cada vez más frecuentes, junto con desastres a gran escala causados por el cambio climático, la infancia es la primera en sufrir las consecuencias. Atendiendo al llamado del Papa, caminemos juntos hacia una sociedad que ayude a los más vulnerables y proteja sus vidas.

Nhân Ngày Thế giới về Người Di cư và Tị nạn năm 2026 Ủy ban Công giáo Nhật Bản về Sự sống, Hòa bình và Nhân quyền Chủ tịch: Đức cha Shinzō Moriyama

Chủ đề của Ngày Thế giới về Người Di cư và Tị nạn năm nay là: “Dù chỉ một trong những trẻ nhỏ này.” Đức Giáo hoàng Lêô XIV đã chọn chủ đề này dựa trên lời Chúa Giêsu trong Tin Mừng theo thánh Mátthêu: “Ai tiếp đón một em nhỏ như em này vì danh Thầy, là tiếp đón chính Thầy.” (Mt 18,5). Qua chủ đề này, Giáo Hội mời gọi chúng ta quan tâm đến từng em nhỏ đang phải sống trong hoàn cảnh di cư, tị nạn hay phải rời bỏ quê hương.

Đức Giáo hoàng nói: “theo Tin Mừng chữ, ‘dù chỉ một người’, là mời gọi chúng ta dừng tính toán. Đây không phải là vấn đề thống kê hay số lượng. Chính nơi các trẻ em, chúng ta có thể đón nhận Chúa và gặp gỡ Người.” Ngài nhấn mạnh rằng bảo vệ phẩm giá của trẻ em chính là gặp gỡ Chúa Giêsu. Vào thời Chúa Giêsu, trẻ em chưa được xã hội nhìn nhận và tôn trọng đầy đủ như những con người có phẩm giá và quyền lợi riêng. Ngày nay, dù xã hội đã có nhiều tiến bộ, quyền lợi và phẩm giá của biết bao trẻ em vẫn đang bị đe dọa. Vì thế, chúng ta cần có những hành động khẩn cấp, cụ thể và hữu hiệu để bảo vệ các em.

Trong một thế giới đang phải chứng kiến những cuộc chiến kéo dài chưa thấy hồi kết, cũng như những thiên tai nghiêm trọng ngày càng xảy ra thường xuyên do biến đổi khí hậu, trẻ em thường là những nạn nhân đầu tiên và phải chịu nhiều hậu quả nặng nề nhất. Đáp lại lời mời gọi của Đức Giáo hoàng, chúng ta hãy cùng nhau xây dựng một xã hội biết đón nhận, bảo vệ và nâng đỡ những người yếu thế nhất, đặc biệt là các trẻ em di cư và tị nạn.

世界難民移住移動者の日・献金（9月の最終日曜日）

「世界難民移住移動者の日」は、1970年に聖パウロ六世教皇が教皇庁移住・観光者司牧委員会（後に移住・移動者司牧評議会となり、現在は総合的人間開発省に統合）を設立したことを受け、「各小教区とカトリック施設が、国籍を越えた神の国を求めて、真の信仰共同体を築き、全世界の人々と『ともに生きる』決意を新たにする日」として設立されました。

「世界難民移住移動者の日」には、おもに日本でわたしたちが会える移住者・移住労働者、外国にルーツをもつ人々、難民および庇護を求める人々、国際的に移動する労働者（船員など）とその家族のために祈り、多文化共生活動を行い、そのための献金をささげます。その献金は日本カトリックいのち・平和・人権委員会、多文化共生司牧部門、また、それぞれの教区を通して、広く支援に役立てられています。

2026年「世界難民移住移動者の日」教皇メッセージ

以下のURLまたはQRコードよりご覧いただけます

日本語
Japanese

*カトリック中央協議会ホームページ

ポスター、このパンフレットも、こちらのページからダウンロードいただけます

<https://www.cbcj.catholic.jp/2026/08/06/39304/>



アラビア語
Arabic

ドイツ語
German

英語
English

スペイン語
Spanish

フランス語
French

イタリア語
Italian

ポーランド語
Polish

ポルトガル語
Portuguese

*教皇庁ホームページ

<https://www.vatican.va/content/leo-xiv/en/messages/migration/documents/20260811-world-migrants-day-2026.html>



「世界難民移住移動者の日」の 献金送付先について

献金は皆さまが所属する
教区事務所にお送りください。

2025年4月～2026年3月「世界難民移住移動者の日」献金のご報告

皆さまからの献金は、50%が各教区の活動のため、50%が当委員会と多文化共生司牧部門の全国的な活動と支援のために使われます。2025年4月～2026年3月の「世界難民移住移動者の日」献金のうち、10,296,057円はカトリック中央協議会への献金として、当委員会および多文化共生司牧部門で活用されます。

いのち・平和・人権委員会は、2026年4月、社会司教委員会のもとにあった諸セクション（正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、部落差別人権委員会、子どもと女性の権利擁護部門、HIV/AIDS部門）を統合して設立されました。教皇庁総合的人間開発省に対応し、社会に開かれた教会として、より良い世界の実現を目指し、いのち・平和・人権に関わる諸課題に、統合的な視点から取り組みます。戦争や紛争は難民を生み、差別や貧困は人権侵害や健康問題につながるなど、現代社会の諸課題は相互に深く関わり合っています。本委員会では、人間の尊厳を中心に据え、それぞれの課題のつながりを踏まえながら、教会内外で、また各地において、いのち・平和・人権の擁護のために活動する方々とともに歩み、福音とカトリック社会教説に基づいた提言の発信、啓発活動を行います。



多文化共生司牧部門は、国籍を超えて多様化するカトリック信徒の一致と真のキリスト教共同体構築のために新しい司牧のスタイルを模索するとともに、ともに歩む（Synodality）教会の建設を目指す日本の教会における、多文化・多国籍の信徒との一致と共生を深めるための司牧活動をサポートしています。2025年に新設。



日本カトリック いのち・平和・人権委員会

tel : 03-5632-4413 fax : 03-5632-7920 e-mail : social-info@cbcj.catholic.jp

木版画：里 圭
デザイン：(株)佐藤デザイン室